

臨死の読書と回復期の読書

鶴見俊輔

私がいつも通っている病院の図書の方から、その病院では患者さん用の図書室があるといったふうに聞いたものですから、私は入院患者にとってどういう本を揃えたらいいかという話だろうと思ってお引き受けしたんですが、数日前にこの会のプログラムを見たら、違うんですね。医学文献の内容によっては耐用年数はどのぐらいか、どのぐらいの年数配置をしたらいいのかというようなテーマなんですね。びっくりしました。

医学文献と私との関係といえば、70年間に一つしかもったことがないのですが、1942年のことで、突然に胃潰瘍の治療の文献を翻訳してくれないか。日本語で2ページなんです。私は哲学科の学生なのですが、その大学の学部には私一人しかいなかった。胃潰瘍について医学部のだれかが論文書くために、日本の医学雑誌にということが書いてあるかにふれたいと思ったのでしょ。

その時に私は非常に苦労したので、今でも覚えているのは、胃潰瘍のことをアルサーというんですね。それだけは52年たっても覚えています。とにかく私は日本語を英語に苦労して翻訳したのですが、だれがその文献を日本語で書いたのか、名前も覚えていません。私が訳したものが役に立ったのかどうか、それも知りません。それが70年の生涯でただ一つ、今日のテーマと私がかもっている接点なんです。

ここにきて自分の思い違いがわかったのですが、大変なことですね。ですから皆さんが勉強のためのきょうのテーマと、ずいぶん違います。

「臨死の読書と回復期の読書」が自分でえらん

だテーマです。あまり学習的でなく気楽に聞いてほしいのです。この話は、本を読もうと思っている患者の立場からです。

まず、本とは何かという定義ですが、私は本というのは、読んでも読まなくてもいいものと定義したい。本を読まなくても死にやしないのですから。水とか食べ物と違うのです。そう定義すると次に出てくるのは、自分が読みたいと思わないのはただの紙なのです。自分が読みたいと思うものだけが本です。

そう定義すると、人に本を贈るというのはとても難しいことです。人にある本を贈ったということで、その人とのつき合いがうまくいなくなることはあり得ることなんです。死に近づいている人に勧める本なんてあるだろうか、私は疑問に思いますね。もともと死に近づいている人は、本を読むことはあり得るか。

たとえば目をつぶるとまぶたの裏にいろんな模様が出てくるでしょう。おもしろいものなんです。これはまぶたのうらの劇場であり、一つの映画なんですね。すぐに変わっていくんです。しかもそれを自分のいろんな想像とか記憶とか望みによって仮託して見立てますから、読み取りが違いうにできる。おもしろいものなんですね。私は、70年なら70年分のその映画を、半ば自作、半ば偶然が与えたものとして、それをみているわけです。

ところが残念なことに、ああおもしろいな、いい形だなと思っても、すぐ忘れてしまうのですよ。ですからものすごくおもしろいと思っても、1分たってから覚えているものは意外に、美術館でみたクレーであるとかマティスであるとか、ピカソであるとか……、クレーなんていうのはまぶたの

裏の形に近いんです。だけどそっちのほうが思い出せるんですよ。まぶたの裏の映画は全く個性的な、われわれが活着している限り、80,90まで生きる人がいるとして、その人の生涯あるものなんです。記憶することは難しいです。それは、臨死の人にとっても最後にあらわれるものでしょう。

死に近づくのに10年、1年、数カ月かかる人もいます。私の友だちの例で言いますと、安田武という友人は癌研で死んだんですが、のどのがんで8年ほど生きましたね。彼が死ぬ前、私が見舞いに行くと、彼は癌研の書見台で本を読んでいたんです。なんの本を読んでいるんだろうかな、私は好奇心をもったんだけど、そういう時に聞けないですね。彼は私にとっては大変に親しい友人なんです。それでも聞けないですね。

彼が死んだあと、私はその本を書見台に近付いてみると、それは岩波文庫を拡大したものなんです。永井荷風の「日和下駄」だった。永井荷風が大正時代に日和下駄をはいて東京を散歩して歩いたでしょう。今は安田武は散歩できなくて、それを読んでいた。荷風の散文は、今死ぬという人間にとっても読むに耐え得るものだという事に感心しました。ああ、そういうものかと思ったんです。

もう一人の友だちは、橋本峰雄ですが、京都に法然院というお寺があるのをご存じの方は多いと思うのですが、法然院の管長をしていたお坊さんです。もともと坊さんじゃなくて京大の哲学科の卒業生だったんですが、京大生だった時にお寺に下宿したんですね。そのお寺の跡取りの娘さんと恋愛した。その娘さんと結婚する条件でどうしても坊さんにならなければならなくなって、彼は思いついて坊さんになって、神戸大学の哲学の教授兼常光院と法然院の住職、あとでは管長、いちばんえらいのですが、になったんです。普通は男女のしがらみを断って仏門に入るんですけども、彼の場合には仏門に入って恋愛を成就したという大変珍しい坊さんなんです。

彼は食道がんでした。病院に入っていて、私は見舞いに行かなかったんですが、手紙をよく出していて、それがいちばんいいということだったんだけど、彼は死ぬ前に何度か京都新聞に短い

文を書いているんです。最後に書いたのが「ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』について」というんです。ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」は長い。昔の岩波文庫で4冊ですから。今は1冊本もありますけれども。

それは彼が10代の時に読んだもので、今、死ぬ前に読み返してみたいと思った。そうすると、自分の思想の変化と成熟というのをその本1冊によってはかれるからなんです。自分はどこまで歩いてきたか、それを本によってはかることができる、自分に対する好奇心をもってたんです。死ぬ前に「カラマーゾフの兄弟」を読み返して、しかもその感想を書いて、これは彼の絶筆でした。すごいなあと思いましたね。

ですから臨死の人が本を読むということはあり得ることなんです。

私の子どもころ、というのは私は1922年生まれ、大正11年です。大正時代を覚えてますよ。そのころは大きな吸い取り紙がはやった時代なんです。私は子どもころの大きな吸い取り紙を覚えている。皆さんの時代にはもうなかったでしょう。このぐらいの机があると、この机に合わせた大きい吸い取り紙が置いてあるんです。神戸にあるかなあ。よほど高齢の人でない記憶にないでしょうねえ。

私が大学に入った時、大学の登録が終わるとこんなでっかい緑色の吸い取り紙をくれるんです。いろいろなことが印刷してある。それをもって校庭を歩いていると、あっ、あいつ1年生だってわかる仕掛けになっているんです。私が大学に入ったのは1939年ですから、'39年にはハーバード大学はそういうでっかい吸い取り紙を新入生に渡していたんです。今もやっているとは思えませんけどね。私は大学卒業以後、アメリカに帰ったことない。ですから知らないんですけれども。

大きい吸い取り紙というのは、ヨーロッパ、アメリカ、それから日本でもはやったものなんです。どういうものかっていうと、これは大英博物館で手に入れたパンフレットです。これは小さく縮小してありますが、これはこの机ぐらい大きいと考えてください。これは19世紀のイギリスの女性の作家、ジョージ・エリオットが机の上に置いてい

たプロッター、大きい吸い取り紙なんです。これにジョージ・エリオットは、私がおもらった緑色みたいに印刷してあるんじゃないで、自分で好きな言葉をずうっと書き入れたんです。

彼女は、書いていてうまくいなくてみずからのペンがとまった時、書きぬいた他人の言葉をみたりなんかしてインスピレーションを得て書いたつもりでいたんですね。これは、どういう書きぬきが彼女の大きな吸い取り紙にあったかというその復刻なんです。

どうなのを書いてあるかという、「真実というものはニュアンスにある」。言葉の陰影ですね。これはルナンの言葉なんです。ジョージ・エリオットは長編作家ですから、長いものを書いて、うまくいかないなと思ってひょっとみると、「真実はニュアンスにある」。そうすると、なるほどそうかと思って、もういっぺん気をとり直して書くって仕掛けになっているんです。それが吸い取り紙、プロッターなんです。

このプロッターに向かって仕事をしていると、これは作家だけがやるものじゃないんですよ。昔は大きな机ってあったんです。今も事務机で大きな机をもっている人がいるでしょう。重役とか社長の机は大きいんだけど、ジョージ・エリオットのプロッターみたいなものをつくっている人、いるかなあ。「急がば回れ」とかそんなものを書いている人がいるのかどうか。昔はそうだったんです。

実務の人もそういうプロッターをもっていたんですね。手紙の上書きやなんかしてインクが乾かない時にちょっとする。はしのほうを使っても、全体はこんなでかいんですから大丈夫なんですよ。

こういうふうにプロッターで何度もみている文句というのは、死ぬ時にもばーっと思い浮かぶような文句でしょうね。ですからこれは臨死の読書として返ってくるようなものでしょう。

ジョージ・エリオットは61歳で亡くなったんです。そのプロッター、大きい吸い取り紙は、ジョージ・エリオットのコモンプレイス・ブックと(書き抜き帳)という言葉があるんです。ブックといっても、ジョージ・エリオットの場合には1枚の大きな吸い取り紙で、今は実際にブックになって

いるわけです。

もっと長生きした人がいるんです。91歳まで生きた人で、E・M・フォスターという人がいるんです。これは近ごろ次々に映画になっているんで、見られた方があるかもしれませんね。「モーリス」というのもそうだし、「インドへの旅路」「ながめのある部屋、ア・ルーム・ウィズ・ア・ビュー」これはなかなかいいものですね。みんなフォスターの原作なんです。

フォスターは、40歳ちょっとで小説を書くのをやめたんです。でもなんか書いていまして、91歳に向かって何を書いていたかという、コモン・プレイス・ブックなんです。つまり書き抜き帳。高齢になってきて死に向かうと、自分が書いてるか人が書いたものを書き抜いているのか、区別がつかなくなってくるらしいんですよ。両方が相互乗り入れの形になってくるみたいですね。

彼は独り者で、同性愛の人なんですけども、一人で好きな本を自分で朗読するんですね。そうすると90歳を超えて、声も低くなって落ちてきても、自分で聞いている分には、バイブレーションが体を使って出てくるから、わりあいきれいに聞こえるんですね。どうですか、自分で朗読してみても、自分でうたう歌っているのは、結構人が聞くよりも自分にとってはよく聞こえるみたいですね。

トマス・ホップズというイギリスの哲学者がいて、これも90歳以上超えたんだけど、ホップズは寝る前に寝室にいて、まず部屋の鍵を閉めて一人で独唱したっていうんですよ、健康のために。それはケーブリーが伝記に書いてるんですけどね。自分の声をひとりでのたのしむという点ではE・M・フォスターの場合も似たようなことなんですよ。

E・M・フォスターの90歳に向かう書き抜き帳の中に書いてあるんです。おもしろいと思ったことを書いてあるのと自分の感想と全部ごちゃまぜに書くんです。これがコモン・プレイス・ブックなんです。

フォスターは詩人のT・S・エリオットの四つのクォーターテッドしているのを読み返してみた。朗読してみた。すばらしいものだ。しかし自分は若いときは劣等感をもってこの詩を朗読したもの

だが、今この詩を朗読すると優越感をもつ。なぜか。T・S・エリオットは人間の苦しみを偉大なものとして感じすぎている。苦しみはエリオットが考えるほど荘厳、偉大なものか。人間が原爆をつくり、ほかの人間に対して落としたあとで、そんなことはいえるのか。と書くんです。おもしろいですよ。むしろ90歳を超えて、今もゆっくりと楽しんでいる自分の基本的な立場のほうが、エリオットの苦しみ崇拜の流儀を超えているというふうに感じたんですね。それが感想に書いてあるんです。

自分の書いたものと同じになって、いわば死に向かって一人として立つということは、自分が人類の代表になっているということなんですね。これは自分の著作だとかなんとか、あまり考えなくなっちゃっているんです。今まであらゆる人間のしたことが全部自分のしたことのように感じられる。人類の代表になって沈んでいくっていう感じなんでしょうね。これはすごいなと思ったんです。

フォースター・コンプレイスブックは訳されていません。ペーパーバックで手に入ります。とってもおもしろいものですよ。

「最後の記憶は風景だ」。これもフォースターのコンプレイスブックに自分の恋愛の記憶が今は風景記憶としてのこっていると書いてあります。読むことも書くことも風景として覚えられるということ、これが高齢に達して沈んでいく人間の境地なんですね。で、自分の好きな本というものも、同じように風景として感じられるってことがあるでしょう。

私はきょうここに本をもってきたんですが、これはおもしろい本ですよ。私は、人に本を勧めてはならないっていう原則をもっているんですけども、原則は破ることがあるんで、この本はすごくいい本なんです。

この本を私がみつけたのは、世田谷の美術館で、田村義也っていう大変私の親しい装丁家が、自分の今まで装丁した本全部を並べる展覧会をやったので、それを見にいったのです。そうしたら、全然私が見たことも読んだこともない著者のものがあって、この装丁がいいんです。

田村義也がいつもいっている装丁の理論なんだ

けれども、装丁は三度ショックを与えなきゃいけないっていうんです。一つはカバーですね。もう一つは、カバーをとった時なんです。これとこれとのマッチが、おっ、という感じになる。もう一つは、開けてみた時に、内側と表紙が三度目のショックなんです。つまりこれが一つのドラマなんですね。田村義也の本は大体いつもそうなっていて、三度ショックがあるんです。

彼はもともと岩波新書の編集者だったんで、中身がわかる人なんですよ。読んでからやるので、レイアウトとか本の持ち重り、これは全部彼のデザイン計算に入っているわけです。そうすると、死ぬ前に自分のそばに置いておく本というのは一つの本のビジョンができるでしょう。それは確かにそういうものとしたら、臨死の読書に値するかもしれませんね。

この本は大変におもしろい本で、私は世田谷の美術館でみつけて、そこで手にとって読んだんです。大変おもしろい本だってわかったんで、もういっぺん自分で京都へ帰ってから注文して手に入れて、また読んだんです。大変におもしろい本で、装丁がいいだけではなかったんです。

ただきょうはこの文を読むことはしません。というのは、私は東京生まれ、東京育ちなんで、京都に四十数年住んでいるんですけども、関西の言葉をうまく関西風に発音できないんです。これは徹頭徹尾大阪なんです。だから私が東京弁でへたにこれを読むと、全く感興を壊してしまうのでね。ただ私はこれを読んでいる時は、いつでも、大阪弁で聞こえてくるんですよ。それはさっきのフォースターの読書みたいなもので、これは読めば結構一番いい形での自分の耳には聞こえるんです。

装丁を楽しんでいるというのは、確かに臨死の読書とかかわりがあるような気がしますね。

若い時は、本は安ければいいと思っていたんだけども、だんだんに考え方が違ってきましたね。本の手ざわりとか持ち重り、そのこと自身が体験なり記憶になるんですね。あの本は、80歳を超えてほけていく自分の母親の記録なんです。それを娘がずっと書いたものです。ユーモアがあってすばらしいものですよ。「母のいいぶん」という本なんです。

私は今70歳で、死ぬことが近いと思うもので、近ごろは書き抜き帳というのをつくっているんです。それはジョージ・エリオットやフォースターに刺激されたってということで、こういうものなんです。昔から書き抜き帳ってよくつくっているんですが、昔は、幕末の勝海舟みたいに1冊の本を筆写するってことを平気でやりましたね。戦争中なんか、手に入れることが非常に難しい本があったんで。だけど今やそういうことはなくなった。

自分のつくっている書き抜き帳、私のコモン・プレイス・ブックですが、たとえばこういうの、「老眼になりて みえくるもののみを まことにみんと 心を定む」。なかなかいい歌でしょう。これは島田修二という人が書いた。

もう一つ、「そして冒険。偉大な冒険とは、同じ顔の中に日ごと見知らぬものが現れるのをみることだ」。これ以外に冒険はないっていうんですよ。これはジャコメッティの「なぜ私は彫刻家であるか」。ジャコメッティの絵って、皆さんご存じですか。ウワーッ、グルグルって書いてあって、自分の細君の絵が20、30、40、50、復刻版が出ているのも30ぐらいありますから、おそらく100以上書いているんでしょうね。でもそれはものすごく長い時間を書くんだけど、そのたびに新しい顔が現れてくるようにジャコメッティ自身には思われたんです。母親と弟と細君の画像を書いています。

だから自分の知っている人の顔の中に、新しいものが常にあらわれるわけなんです。それをみられるかみられないか。みる力をもって、それをみる、それが人生の冒険で、それ以外に冒険はないっていうのがジャコメッティの信条なんです。すごいと思いますね。ジャコメッティの仕事はそういう仕事なんです。

確かに人生の冒険は、そういうもんでしょ。

これは私の書き抜き帳なんですけど、それが臨死の読書に触れた感想なんです。

もういっぺん戻ってきますが、回復期に読む本は違うと思うんです。皆さん、病気をされたことあると思うんですけれども、回復期というのは、自分の前に新しい可能性がみえる時なんで、いわば人生の踊り場ですね。そこからさらに先がさま

ざまにみえてくる時なんです。その時に読む本というのは自分の中に入ってくる。しかし、回復するその病気によって違うと思うんです。

私はうつ病もちで、今まで3度、うつ病にかかったんですが、うつ病の回復期に読んで自分の中に深く入った本でないですよ。うつ病って、特別な病気なんです。皆さんの中で精神科のある病院に勤めておられる方があるかもしれませんが、ちょっと違うものなんです。うつ病って、よくなったりまたわるくなったりしながらよくなっていきます。ある時から急に、うわっ、治ったというものじゃないんですよ。大体治ったあとで自殺が起こって、治ったという時がいちばんつらいんです。あした病院を出るっていうその日に自殺が起こりますよ。確かに久保栄はそのようにして自殺した。

久保栄の自殺は、私が入院していた時にくっついていたんですが、その時に久保栄の友人が私に「君と同じ主治医にかかっていたらよかったね」って言ったんです。それぞれジャコメッティのように、顔の判定は難しいんですよ。うつ病の患者っていうのは大体みえっぱりですから、顔にあらわさないんです。それが病気の特徴なんです。うつ病自身の治療は医学的にはそんなに難しいことないみたいですが、その判定と診断は大変な熟練を必要とするらしい。私は偶然、かかった医者がよかったんです。

とにかくうつ病から3度、回復しているんですが、その回復期は長いんですけども、その時にこの本を読んでよかったとか、非常に自分の中に深く入ったって本はないんですよ。これは不思議ですね。

ところが外科手術を受けた場合には回復期が歴然としていて、自分の感覚がものすごく新しくなって、みえる空の一角そのものの変化が愉快に感じられるし、木の幹があるっていうだけでも愉快に感じますね。ましてや本が自分の中に深く入ってくるってことはあるんですよ。

私の場合には外科手術っていうのは、戦争中の海軍病院で胸部カリエスの手術を2度して、この回復期は愉快的な体験でした。その時に読んだ本は自分の中に入っています。ところが私に非常

な大きな力をもっているのはうつ病で、70年も生きているとかなりいろんなことに鈍くなっているんですけども、もう一度うつ病にとらえられたくないって気持ちが非常に強いですね。うつ病だけがこわいです。だから私が自分の人生の上での決断というのは大体、これをやったらうつ病が起るか、自分の内部に聞くサインが出るんですよ。それで決めているんです。

私は22年前に大学を辞めたんですけども、単純なんですよ。学生が素手で立っているのを警官がなぐったでしょう、機動隊を呼んで。機動隊に電話をかけたのは教授なんで、教授はただ電話をかけて機動隊を呼んで学生をなぐらせるんだけど、ああ、この大学にとどまっていれば、確実にうつ病が起るなと思ったんです。で、ポッと辞表を出したんです。

もちろん機動隊導入に反対するっていう立場があれば、大学に残っていたっていいと思うんです。理論としてはそうです。しかし私にとっては、うつ病になって大学で給料をもらう……、もちろん休めるわけですから、給料をもらっているっていうよりも、うつ病でなくて食うに困っているほうがずっと楽なんですよ。それはずっと楽ですね。それはうつ病になった方があるかどうかかわからないけども。これだけたくさん人がいれば、1人や2人、うつ病の患者である体験をもった方があるかもしれない。うつ病ってそういうものなんですよ。

ポケットの中に全然カネがなくなって、その辺をよたよた歩いても、私はうつ病でなければ、それだけで幸せですね。

大体そういうサインが出るんですよ。サインが出かかる時に、うつ病を迂回する方法を考える。そのための読書っていうのがあるんです。それは私の場合にはディケンズの長編小説です。長編小説だから、ものすごく時間がかかるわけです。毎日30ページ読んだって、1カ月かかりますね。そんな感じ。

ですから私にはまだ読んでないディケンズの長編小説がいくつかあるのが楽しみです。自己治療上、役に立つわけです。

こういうふうに自己治療ができるようになると、

いくらか自分個人に対してだけ精神科医になるわけですね。他人に対しては精神科医になれませんよ。私のところへは昔から精神病をもっている人がよく来るので、今まで日本でいた三つの大学のどの場合もそうだったけれども、私は相手がうつ病だという場合にだけ、いくらか助言をする。あとは黙って耐えるということだけしかならないにしているんです。それだけ昔に比べれば、少なくともうつ病に対しては成熟してきたといえるんでしょうね。

精神病の患者に対して非常に共感をもっている精神科医で、中井久夫という人が神戸にいます。中井久夫の成熟の定義っていうのは、「退行に湯あみして日常に戻ってくる」というんです。退行に湯あみして日常に戻ってくる、その能力を身につけた者が、そのこつが成熟なんですよ。

少年、青年、中年、老年、いずれも日常の職場で、あるいは家庭においてできえも、背伸びをして暮らすってことがあるでしょう。背伸びを強いられる。そういう状態から自分を引き離して、退行できる場を自分の暮らしにつくる。そういう工夫が成熟なんですよ。

ですから酒を飲むとか歌をうたうとか、これはいずれも私の能力を超えるので、私はやりません。私にはそういう退行の場がないので、読書というものが生じてくるんです。私にとっては赤川次郎を読むとか、これは250冊は確実に読んでます。それから藤沢周平を読むとか、これも100冊以上読んでますね。

だから私の息子が高校生だった時には「おい、赤川次郎、おもしろいぞ」というと、息子が「なあに、ドストエフスキーに比べれば」というんですよ。だから彼はまだ成熟していない(笑)。成熟っていうのはそんなものじゃないです。ドストエフスキー、トルストイ、プルーストだけを追っかける人間は、成熟していないんです。

回復期を病院で迎える人にとっては、この病院でおもしろい本に出会ったというチャンスが与えられることが非常にあるんですよ。つまり見舞いに来る人が本をもってくるっていうのは、あてにならないんです。これはしいられるんですから、自分の読みたい本をもってくる友人がどれだけ自

分にあるか、疑わしいですよ。ただ、もし病院の中に図書室があれば、自分で選ぶことができるわけだから、おもしろい本との出会いがあるかもしれません。

それが外科系統の回復期にある人だったら、その病院の図書で大変におもしろい本に出会ったという印象を、生涯にわたって重大な出会いがあり得る。この病院にいったからこの本に出会えたというふうであってほしいという感じがしますね。

それはどういう本かはわかりません。ただ、現代の社会は非常に複雑になっていますから、それを単純な形に引き戻してとらえることができるような本というのは、回復期に重大でしょうね。日常の職場にいくと、複雑なものを複雑なテクニックで対応することを教えられますからね。ですから少女小説、少年小説、絵本、漫画というものは大切だと思いますよ。だけでも何が優れた漫画かというふうなことは、これは大変おもしろい問題ですが、簡単に決められることではないんですね。そういうことを考えてほしいと思いますね。

それから、病院に付き添っている人が読む本であるでしょう。私は、私の母親が死ぬ時に、これもがんでしたが、夜、昼、付き添っていて、そのそばで読んでいたのが、岩波文庫のケルケゴールの「反復」っていう本だったのです。私はびっくりしたんだけど、自分の母親がこうやって死んでいく時に、ケルケゴールの「反復」を読んでいて、ケルケゴールは押し負けないんですね。自分の母親の死っていうものに対して。ケルケゴールはすごい人だなと思いましたね。そういう本であるんですね。

もう一度、臨死の読書に戻りますと、近ごろ、丸山真男の「忠誠と反逆」というとても大きい本が本屋に出ているんです。この本の後書きに書いてあるんですけど、この本の中に入っている「思想史の方法」という論文を丸山さんが発表した時に、それが英訳されたんです。

日本人が英訳したのかアメリカ人が英訳したのか書いてないんですが、日本人が英訳したとしたらさらにおもしろいので、そう考えるとしますと、丸山さんのテーマは、思想史ですから、昔の人の著作があとの人に伝わらないっていうことなんで

すね。それは思想史としての根本問題ですね。そのことをいうために、シラーの言葉を引用しているんです。

その言葉は、「魂が語り始めるやいなや、ああ、魂は語らない」というんです。ところがこれを英語に訳した人は、こういうふうの意味をとったんです。「魂は語るか語らないか、ああ、魂は語らない」これで丸山さんの論文はめっちゃめっちゃになっちゃってるんです。これはシラーの元の文の取り違いです。つまり「やいなや」というのは漢文脈でしょう。英語だったら「as soon as」と訳のが普通です。ところが「やいなや」というのを「そうかどうか」というふうには、「語るか語らないか」というふうにとっちゃった。意味はめっちゃめっちゃなんです。

シラーのいっていることは「魂が口から言葉を出して語り始めるやいなや、もう魂はそこにはいない」というんです。それが言葉の大変難しいところなんです。われわれは言葉に自分の意味を乗せようと思っているんだけど、口から言葉が出たとたんに、意味はそこに乗っていない。形だけなんです。そのことをいいたいわけですね。

魂が語る言葉っていうものが、臨終期においては重大です。だから自分が今まで読んだ本は全部魂を語らないもの、そこに本があったってこれは自分にその魂が語りかけるものではないという場合に、大変具合が悪い。そういう魂の言葉を書物は伝えない。死に直面した人にとって本は不要だということですね。

ドストエフスキーは死ぬ前に、聖書をパッと開けて、ここを読んでくれ。全くでたらめにですよ。読んでもらったのを、自分にとっての予言とみたんですね。しばらくして死んでしまったといえます。そういう例外的な人はいることはいるんですね。だけど統計上、死んでいく人にとっては本は不要ですね。むしろまぶたの裏にある曼陀羅、自分だけの映画、自分だけの形、それにどういう意味を付与するかが、そこにどんな意味が現れてくるかが重要でしょう。

イギリスのオルダス・ハクスリーが死ぬ前に、LSDの量を処方したんです。それがオルダス・ハクスリーの全著作の絶筆です。そのあと、LSD

を飲んでどういう形を彼がみたかは、だれも知らない。形が最後の本ではない本ですね。

だから死に直面する人にとって、言葉は何も語らない。そういう時に魂が語りかけるものはなんだろうか。

志賀直哉という小説家がありますね。志賀直哉は臨終の時に、延命処置、酸素マスクや何かを自分でとったんです。そのしぐさは、志賀直哉の全著作の延長線上にある、それを集約する身振りだったと思いますね。彼は、自然に任せるのがいい、自然に死なせてくれ。それは初期からずうっと貫いているもので、その最後の身振りっていうものは、病院にとっては非常に具合の悪いことなんです、一種の病院批判でもありますね。

病院も一つの制度なんで、全体が制度になると、こういう延命処置は臨死の人にとってすることになっております。「なっております」っていう形なんですよね。だから大体大東亜戦争なんていうものも、国民投票と何も関係ないでしょう。議会の投票とも関係がない。あつ、戦争になった、「なっております」というやつなんですよね。われわれは「なっております」ということに慣れてるんです。で、病院もそうなんです。「延命処置をすることになっております。

志賀直哉は自分でスッと取ってしまうことで、志賀さんくらいになると、病院として押しつけられなかったということでしょうね。私はこの身振りはおもしろいと思いますね。それは志賀さんの著作の延長線上にある魂の言葉ですね。

読む側に立ちますと、本を読んで、ああ、ここにいるのは無筆の人だなという感じをもつことがあるんです。これはいいんです。あらゆる行動、あらゆる表現の極地だと思うんです。打たない太鼓、踊らない踊り、書かない本、あらゆる表現はそこを目指している。それに近いものが身振りなんで、そういうものとして私は志賀直哉の最後の身振りをうけとります。

著作者の中で、その文章を読んでいると、無筆の人であるかのような印象を与える人がおもしろいし、そういう人の文章は、死んでいく人間にとっても読むに耐えるのではないかという気がします。だれがそういう人かは、皆さんに考えていただくほかありません。

(本文は、日本病院会の許可を得て、日本病院会雑誌 39 巻 12 号より転載しました。)